

井上 洋

オーストリア共和国への日本青年派遣は、国際青年育成交流事業として17年振りのことである。17年前の2001年といえば、アメリカ同時多発テロが起きた年である。そのテロを機に歴史は大きく動いた。米国ブッシュ政権は、アフガニスタン侵攻、イラク戦争へと踏み出し、以来、異なる宗教、民族の間で軋轢が深まった。

今回は、アフリカや中東諸国からの難民が欧州に押し寄せるなかの派遣であったが、その意味は、とても大きかった。

1.国際都市ウィーンで活躍する多様な機関の多様な人々

ウィーンといえば、「音楽の都」というのが、私のウィーンに対するイメージである。到着翌日、国際青年育成交流事業の既参加者の現地青年が市内を案内してくれた際、彼らにクラシック音楽のことを尋ねてみた。すると意外と知らないのである。さすがにモーツァルトは知っていたが、日本では毎月どこかで交響曲が演奏されるグスタフ・マーラー（1860-1911年）は、「その名前を聞いたことがない」という。マーラーは、オーストリア帝国ボヘミアからウィーンに音楽を学びにやってきて、ウィーン宮廷歌劇場（現在のウィーン国立歌劇場）の指揮者まで上り詰めるとともに、いまでも世界中のクラシックファンがその作品を好んで聴く大作曲家である。その名前を知らない現地青年がいたことは、私にとって想定外のことであった。

モーツァルトが活躍した18世紀後半から、音楽はイタリアのものを正統としつつも革新に躊躇せず、またファッションなどではトルコブームが起きるなど、他国の文化を積極的に吸収する都市がウィーンであった。そこを首都としたオーストリアは、他の民族を支配した帝国が第一次世界大戦の敗北により崩壊、共和制に移行し、ナチス・ドイツによる統治を経て、第二次大戦終戦後、再独立、中立国としてNATOに参加せず、首都ウィーンは「第三の国連都市」として国際的な役割を果たすという、独自の立ち位置を確立していった。

私たちがウィーンで宿泊したマグダス・ホテルは、ソ

マリアやアフガニスタンなどからやってきた難民を雇用していた。移民、難民が定住し安定した生活基盤を築くには、言語とオーストリアでの仕事のやり方を学ぶ必要があるが、マグダス・ホテルは独自の教育を行うことで難民の自立を支援しつつ、ソーシャル・ビジネスとしても成功を収めていた。「No one will be left behind」という国連の掲げる持続可能な開発目標（SDGs）の理念を体現している事業であると感じた。

そのホテルから連日、官民の様々な機関を訪問したが、そのコーディネータ役を務めて下さったのが、オーストリア連邦首相府の第5総局第7局（国際・欧州家族・青年政策担当）次長のK史であった。彼女の組んでくれたプログラムは、オーストリアの社会実相やヨーロッパにおける立ち位置を理解するに十分なものであった。

例えば、Spacelabである。Spacelabは、15歳から24歳までのドロップアウトした青少年を支援しているNPOである。オーストリアにおける全世代の失業率は5.6%であるが、25歳以下の失業率は9.6%と高い。その現状を踏まえ、このNPOが取り組む青少年の自立支援プログラムの必要性、実効性を現場訪問で十分、理解することができた。プログラムは、日本で行われている就職直結型の「手に職的なもの」だけではなく、映像や音楽を通じた自己表現のメソッドの指導などにも及び、実際、ここに通り活動が続けることで自信を取り戻した青少年にも出会えた。

また、ウィーン国際空港に程近い平原にあるオーストリア赤十字の災害危機ワークショップ救助犬部隊にも驚いた。1頭3～4年かかる救助犬のトレーニングを災害現場に模したフィールドをつくり、他に専門の職を持っている人々がボランティアで行っているのである。オーストラリアは前述の通り中立国であり、いつ何時起こるかも知れない災害やテロの現場に外交関係を意識することなく、いち早く駆けつけることができるが、その有力な手段が救助犬なのである。因みに、日本でも身近な存在となっている盲導犬の育成は通常、1年弱である。時間のかかる救助犬の育成に資金と労力をかける

オーストリア赤十字の取り組みは、日本でもっと知られて良いと思う。

私たちは、ヤング・カリタスに三日連続で訪問した。カリタスは、カトリック教会の機関であり、世界で165の国の組織の連合体として、カリタス・インターナショナルが組織されている。世界のすべての人々、すべての信仰、そして尊厳を守るために活動しており、日本でも終戦から間もない1948年に社団法人カリタス会が組織され、以来、貧困対策を中心に多面的な活動を展開し、1970年にはカリタス・ジャパンとして、カリタス・インターナショナルにも加盟、世界の難民に対する支援や東日本大震災など被災者支援などを行っている。

日本と同じように、インターナショナルの組織のもとにあるカリタス・オーストリアには、ヤング・カリタスが組織化されており、ヨーロッパ各国のヤング・カリタスと連携して若者の能力開発を行っている。イベント、ディスカッション、振り返りのためのレポートと、しっかりしたメソッドを確立させており、それを日本からやってきた青年にも体験させようと、プログラムを準備して下さった。

私が注目したのは、ファッション、芸術・文化、余暇活動の3班に分かれ、現代における若者の表現について日本とオーストリアの青年が話し合うというプログラムである。スマホの高機能化に伴って、若者のコミュニケーションや情報入手、自己表現の手段は、ネットを通じたものが主流となっているが、日本の若者もオーストリアの若者もその点において変わらないことが分かった。

ウィーンでは、ヤング・カリタスの案内により国連本部にも訪れた。ウィーンにある国連機関は、国際原子力機関 (IAEA) や国連工業開発機構 (UNIDO) などであるが、オーストリアは憲法律により原子力発電禁止を規定し、再生可能エネルギーに力を入れている。オーストリア国鉄で国内を移動した際にも、車窓から数多くの風力発電の風車を見た。この点においては、原子力発電をベース電源として位置づけている日本と立場が異なるが、陸続きで同じ周波数の電気が国境を越え融通できるヨーロッパと島国の日本では、状況が異なることを踏まえる必要はあろう。

2. 人々が自然に浸る保養地グムンデン

オーストリアに到着して1週間が経ち、ウィーンでの活動を終えた私たちは、グムンデンに向かった。オーストリアの人々は、他のヨーロッパの国の人々と同様

に、プライベートな時間をとても大切にしている。日本では、未だワーク・アンド・バランスが議論の域から脱せない感があるが、例えば日曜日・祝日の商業店舗完全閉店など、国民の意識がシンボリックなかたちで示されている。それをウィーンで週末、目の当たりにしていた私たちは、得られた時間を自然に浸るために使うオーストリアの人々の行動に触れたのが、グムンデンでのプログラムであった。

グムンデンは、ウィーンから西へ230kmほど、自動車でも2時間半ほどのところにある標高400メートルほどの保養地である。トラウンという名の湖があり、その湖畔は日本でいえば箱根のような雰囲気がある。そこにあるゲストハウスをベースに、現地ネイチャーガイド、B氏の案内によりハイキングを楽しむとともに、グムンデンの地形や樹木、花々の特徴について理解を深めた。

初日は3時間ほどのハイキングの後、夕刻、湖畔において、地元の漁師の方がその日、漁をして確保しておいてくれたトラウトを塩焼きでいただいたが、この地域周辺には塩の名産地が多く、ここグムンデンはその集積地として重要な役割を果たしてきた。正に地産地消の素晴らしさを実感した夕食であった。

翌日は、岩山のトラウンシュタイン山とトラウン湖の美しい景観を標高の高いところで楽しもうと、ケーブルカーを利用して1,000メートルほどまで登り、ほぼ終日、歩いた。野草を観察、採取しながらのハイキングであったが、下山後は地元青年たちとともに、その野草を使い数種類の料理をつくって食した。日頃、山に入って食事をつくる経験の少ない参加青年も、ダッチオーブンを扱う本格的な野外料理を楽しんだ。

3. 産業都市リンツの成長戦略を探る

グムンデンに2泊した後、私たちはリンツに移動した。リンツは、ウィーン、グラーツに次ぐオーストリア第三の都市であるが、人口は20万人ほどと、日本でいえば、地方の県庁所在地のなかでも小さな都市と同じ規模である。日本の地方都市というと、近年、少子高齢化、若者の大都市への流出により、都市機能の維持が困難になるなど危機に直面している。しかし、リンツでは、オーストリア国鉄の中央駅を中心に、市民生活に不可欠な交通手段がトラム、バスによりネットワーク化されており、極めて住みやすい街であるという印象を持った。

そうした街の利便性を体感したのは、現地のボーススカウト、ガールスカウトの活動に参加する若者と行った

ゲームのなかでのことであった。そのゲームは、日本では鬼となつてグループが先行して市内を交通機関で移動、その先の写真をスマホで他のグループに送り、それをもとに鬼が次に向かう場所を推測して追いかけるというものである。日本の地方都市のように、交通手段が年を追うごとに縮減されている都市ではほぼ不可能なゲームであるが、人々がストレスを感じない程度にトラムやバスが走るリンツでは、日本でなかなか進まないコンパクトシティ化が実現していることを知った。

リンツは、もともと鉄鋼業を中心とした産業都市である。一時は大気汚染やドナウ川の水質汚濁が深刻化したが、それも公害対策の技術を駆使して克服し、きれいな青空とドナウの流れを取り戻し、観光都市としても内外の観光客を惹きつけている。重化学工業に依存していたかつての姿から脱皮するため、若者が社会のニーズを捉まえイノベーションを興すためのインキュベーション機能の強化も図っている。

その具体的な取り組みの一つが、タバコ工場を改装して設けられたFactory300である。安価な料金でオフィス機能が提供され、異なるジャンルの人々との出会いと、起業のためのノウハウを専門家からアドバイスを受けられるシステムが用意されている。デジタル化が急速に進むなかで、若者の発想による新事業をリンツの将来を支える新産業に発展させようという取り組みは、日本でも参考にすべきだろう。Factory300の会員になるには、月額10ユーロ（プラス付加価値税）が最低ラインである。Factory300の施設に入り、様々なイベントに参加できるだけの権利であるが、この上には月額100ユーロを支払い、オフィスとしての使用が許され、飲食などのサービスを提供されるものもある。300人ものエンジェルが、良い事業であれば資金提供する用意があるというから、起業の実現性は高いのだろう。

若者の教育といえば、芸術教育もこのリンツでは目玉といえるものなのかもしれない。私たちが訪れたブルックナー大学は、古い歴史を持つ音楽院が発展して創立された私立大学である。専攻は、音楽、バレエ、演劇の三つであり、50か国から集まった約800人の学生が在籍している。芸術教育を重視しているオーバーエスターライヒ州からの支援により、学生が支払う学費は年額10万円ほどであるというから、日本では信じられない低い負担で最高レベルの芸術教育が受けられる。当日は、Mさんという東京藝術大学声楽科を卒業され、同大学のマスタークラスで学ぶ方にお会いできた。

Mさんには、同大学のピアノ科教授の日本人、Kさんのピアノ伴奏により、メンデルスゾーン

の「歌の翼に」を披露していただき、心温まる交流ができた。

私たちは、リンツでの最後の訪問先として、日本からやってきた企業人も籍を置くグローバル企業を訪れた。三菱重工業と日立製作所が合わせて51%、シーメンスが49%の株式をもっているプライメタル・リンツである。その日本人役員、社員の方々から、グローバルな経営環境に身を置いて働くことの意義や課題などをお話しいただいた。プライメタル社は、鉄鋼の生産設備をつくる企業で、より高性能、高品質な鉄鋼製品を生産するための設備を納入、メンテナンスなども行う。世界の鉄鋼メーカーの統合もあって、生産設備をつくるメーカーも結集しなければ乗り切れないとの判断から設立された。元をたどれば、世界各国の同種の企業10数社が吸収合併を経て現在の会社になっており、経営統合の効果を出すには、全世界7千人の従業員をまとめ、一体感を醸成しなければならない。同社は、「AS ONE」というメッセージ性の強い言葉を統合後の目指すべき姿として掲げたが、冒頭、お話しいただいた小川浩史副社長は、「文化的なバックグラウンド、独自の技術といった多様性を活かした経営の道を進む方が良い」という趣旨のお話をされていたのが興味深かった。参加青年には、若い日本人社員の皆さんと自由に質疑ができる時間を設けていただいたが、海外で働くこと、多様性の中で付加価値を生み出していくことの面白さを教えていただいたように思う。

このリンツ訪問の後、参加青年はそれぞれ2泊3日のホームステイを体験した。2週間に及ぶ旅程でかなり疲れがたまっていたが、このホームステイで、オーストリアの人々の優しさ、温かさに改めて触れ元気を取り戻したようであった。

4. 本事業の意義と参加青年への期待

かくして、本団の参加青年は全員、全てのプログラムをひとつも休むことなくこなし帰国することができた。本事業を通じて確信したことは、本事業が青年の英語運用能力の向上のためのプログラムではないということである。彼の地における多様な人々の真摯な取り組みを自身の眼で見て感じ取る。そして、分からないことがあれば躊躇せず質問をし、また違和感があれば自身の意見をはっきりと言う。そうした一連の動作が即座に、そして自然に出てくるようになるための研鑽の場である。それは将来、多様なバックグラウンドを持つ人々の集まるグローバルな社会に身を置いた時の予行演習になるものである。

今回の派遣先であるオーストリアは、言語や文化の違いを互いに認め合い共生する社会を形づくる国である。それゆえに、参加青年がこの先、学業や仕事の選択の場面において、振り返り活用できる様々な知見が得られたものと確信する。

東アジアにあって多文化共生の道を探ろうとしている日本にとっても、参考にすべきオーストリアの取り組みは数多くある。そのことを認識した参加青年が、奉仕の精神を胸に、新しい日本の社会をつくりあげていくことを期待したい。